玉置豊次郎 著

日本都市成立史

われわれ都市計画にたずさわる者にとって最大の関心事は，われわれの都市の将来のことである。わが国の都市は今後どう変わってゆくのであろうか，また，どう導いていかねばならぬのであろうか。明治以来百年余り，わが国の社会一般は西欧化の一途をたどって来，したがって，われわれの眼は常に西欧の都市にそそがれがちであるし，また，わが国の都市はそれにならって改造されてきた。しかし，われわれはただ無考えに古いものは壊せばよいとしてきたわけではない。古い町々を見るたびにどういう過程でこれらの都市が成立してきたか，そこでどのような暮しを人びとが行ってきたかに強い関心をもってきた。都市は文化の結果であり風土の所産である。歴史的なわが国の都市は，西欧あるいはその他の外国の都市と比べて，独自の長所と欠点を持っているはずである。いずれを除き，いずれを伸ばすべきか。このような意味で，いわば手当り次第に都市の歴史に関する書物を読みあさってきたが，本書の著者のいうように，これまで個々の都市，特定の地域あるいは時代の都市に関する研究書は数あるけれども，全国を通じての，また上古から徳川初期に至る全時代的のそれはなかった。本書は，その意味でわれわれの渇をいやしてくれる貴重な業績である。

著者の玉置豊次郎氏は関東大震災の年に東大の建築科を卒業され，復興局で東京の復興計画に，大阪府で建築行政と土地区画整理の指導監督に，また愛知県では名古屋その他の戦災復興事業に関与された都市計画の大先輩である。その後，大阪工業大学に転じられたが，役人時代から「いつも感心し続けたことは，われわれの先祖が造られたこれまでの日本の都市が，非常に良くできているということであって，終始それが手本になるのであった」がゆえに，長い期間をかけて多くの都市を見てまわり，多くの資料を収集されての結果が本書といってよろしいかと思う。本書には「都市建設資料集成」という副題がついているので，あるいは単なる資料の寄せ集めと誤解されるおそれがあるが決してそうではない。歴史上の都市とそれをつくり上げた人びとを敬愛し，わが国の古来の都市計画の独創性と長所を顕章しようとする意途のもとに多くの論証がなされているが，「論拠を確実ならしむるために，煩瑣をいとわず多くの資料を挙げた」所以である。著者所蔵の多くの古図，古図の不正確さを補うための明治 10 年代から昭和初年までの陸地測量部地図，それに古文書の引用，まさに資料集成の名をあざむくものではない。由来，建築学科には建築史の講座があるが土木工学科にはない。しかし，土木家といえども歴史に学ぶ意途のあることは，当学会で明治以前土木史を刊行し，さらに大正以降，昭和 40 年までの土木史を出していることでも明らかである。古いものをこわすときに，こわされるものにまつわる歴史について，せめて一顧の労をとられんことを会員諸賢にお願いしたい。

さて，本書は千ページ近い大著であって 3 編から成っている。第一編は，近古以前の都市成立の吟味と題し，上代の各帝都，国府，太宰府などの国家権力による都市造営，下っては，平泉，鎌倉の荘園時代，守護地頭時代の地方都市を詳しく記述し，さらには中世期の門前町，港町などの自然発生都市にふれている。第 2 編は近世初期の地方都市建設事情と題し，人口増加，商工業の発達などによる地方都市発生の 5 つの原因を吟味し，90 の城下町について諸侯による都市建設の事情を詳述している。中央権力による大工事がどのようにして遂行されたか，わずか 50 年間に 200 以上の都城市が建設された建設ブーム，また，それの都市計画の独創性，諸侯の都市繁栄などはなはだ興味深い。第 3 編は近世初期の地方都市建設計画とし，城下町計画の評論であるが，位置選定，治水工事，上水道，道路，町割，世界に 200 年先んじた用途地域制，宅地，建築から，さらに建設資材，建設要員について論及している。大工事がいかに短期間に遂行されたかに読者は驚くこと必定である。　（松井　達夫・評）

理工学社刊，A5 判・984＋12 ページ，定価 18 000 円．昭和 49 年 5 月 17 日受付．